僕が歩けば変人が見つかる

かマぼこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕が歩けば変人が見つかる

【Ｎコード】
Ｎ１４７６Ｗ

【作者名】
かマぼこ

【あらすじ】
これは自称村人Ａである僕が主人公のそこら辺にありそうな学園もの……だったらよかったのに……はぁ……
僕は変人の遭遇率が高すぎる。　一言で言うとそんな感じの話

一話、自動販売機の人（前書き）

一話、自動販売機の人

変人……変人とは変わった人、普通、一般人とは大きくかけ離れている人のことである。

僕はその変人にならない様、必死に生きている高校生、小糸（こいと）歩生（あおい）ごく普通の心配性の一般人だ。

僕の高校生活……絶対に変人には見られたくない！！

そう意気込み、入学式に向かった。

今思えばもうちょっと早めに行くべきだったと思う……いや、ずっとあそこにいったっぽいから意味ないけどな

僕の今日から通う高校は家から徒歩十分、中学校のときは自転車通学で三十分だった分近くにコンビニが出来たような喜びを覚えた。

わかりにくい例えだと言わないで欲しい。

言っておくが僕はアニメやゲームの主人公とは違い村人Ａみたいなポジションなのだ。　歩けばイベントが起こるとか非日常的なことがあるわけないだろう？　一般人にそんなイベントある筈な……い。

僕はアニメやゲームの主人公だったのかも知れない。　イベント遭遇だ。

「……」

自動販売機の前でうーん……と唸っている女がいるのだ。　別に普通じゃないかと思った人、甘いな、変人に詳しい僕にはわかるんだよ。　彼女は変人だ。

お金を入れては悩んで返却されてまた入れては悩んで返却されてを繰り返してる。　なんだこの女は？何をしてるか凄い気になる……

普通の主人公なら何をしてるか聞くだろう……普通の『主人公』ならな！

僕はキングオブチキンとも言われてるんだ！そんな僕が変人かも知れない人に話しかける訳ないだろう？　僕は普通の高校生活を送るんだ！　出鼻を挫かれてたまるか！　僕のスルースキルをなめんなよ！

「……」

僕は無言で自動販売機の人（命名）を無視して歩き出した。

「うーん……あっ！そこの人ちょっと待って！」

よーびーとーめーらーれーたーー！？　まさか僕のスルースキルと『あの人ちょっと話しかけづらい雰囲気だよね～』が効かないだと……！？

くっ……！だがこんなことでへこたれる僕ではない！　僕は普通の高校生活を送るんだ！

「すみません……ちょっと急いでるんで……」

必殺！『敬語で距離を置く』！！　敬語で自動販売機の人との距離を置き、そのまま逃げてやる！

「え～……あっ！その制服私と同じだ～！しかも新入生のデザインだから同年代だ！　入学式までまだまだ時間から大丈夫だよ！」

お……同じ学校だとーー！？　しかも同年代いいいいい！！　やばい……僕の心臓の鼓動が最近のロックより早い。　ああ、どうしよう……

「……何のようですか？」

仕方なく……自動販売機の人と話すことにした。　はぁ……せめて変人ではないこと祈るしかないか。

「同級生なんだし敬語じゃなくていいよ～」

あはは～と自動販売機の人が笑いながら言う。　自動販売機の人の容姿は長い黒髪に真っ白な肌、例えるなら雛人形かな？　背も小さいし

「……うん、じゃあ、何のようだ？」

僕は大して面白みの無い言い方に変えた。　自称村人Ａの僕は面白さのカケラもないのだ。

「それがね～このプリンシェイクを飲みたいんだけど～……本当にこのプリンシェイクの下にあるボタンを押して本当にプリンシェイクが出てくるのかわからないんだよね～」

「は？」

意味がわからない。　やばい、この人絶対、圧倒的、確実に、『変人』だあああ！！

いや……待て、落ち着け、歩生！　まだ……まだこの人が変人かどうか決め付けるのは早すぎるぞ！　実は昔、プリンシェイクのボタンを押してコーヒーが出てきたとかそんな感じの苦い思い出があったのかも知れんぞ！　コーヒーだけに

自称村人Ａの僕のギャグセンスがその辺のおっさんと変わらないことは置いといて……

「どっ……どういう事だ？」

「どういう事だ？　ってそのままだよ。　このプリンシェイクの真下にあるボタンを押すとプリンシェイクが出るのかわからないんだ。　いや、プリンシェイク以外でもそうだ。　このコーラの真下にあるボタンを押すことによって本当にコーラが出るのかわからないよね？　実はこのプリンシェイクの隣にあるコンポタージュの真下にあるボタンを押すことでプリンシェイクが出るかもしれないよね？　その顔は絶対ありえないと思ってるでしょ？　ははっ！バレバレだよ。　私の周りの人はよくそんな顔してたからね。　まぁ、私に友達なんていないんだけどね～！はっはっは～……さて、話を戻そうか、プリンシェイクの前に自動販売機のボタンを押したら本当に飲み物が出るの？　って思うね！　それ以前に百五十円のジュースを買おうと五百円入れて三百五十円帰ってくる根拠がこの自動販売機からは全く感じられないんだ。　感じられないって何か卑猥とか思わないでね～、それよりプリンシェイクの真下のボタンを押すと本当にプリンシェイクが出てくるのかの話に戻すけどさ～、まずボ

タンのところにつめた～いって書いてあるけど本当に冷たいの？　百人中百人が全員冷たいって言ったの？　実は冷たくもなくあったかくもなくなまぬる～いなんじゃないの？　つめた～いと表示されてるけど絶対的根拠があるの？　実はつめた～いと思っていたけど思ってたよりもつめたくはなかった～じゃないの？　断言できるということは確実的な自信があるの？　それよりプリンシェイクって書いてあるけど本当にプリンシェイクなの？　パッケージはプリンシェイクって謳ってるけど中身は麦茶ってオチじゃないの？　中身がプリンシェイクだったとしてもそれは本当にプリンなの？　プリンの原型を留めてない時点でプリンとは言えないんじゃないの？　それならシェイク何じゃないの？　なのにこの商品名は詐欺だよね？　今すぐプリンの味がする物のシェイクに訂正するべきだよね？　しかも百二十円ってどうしてそんな値段にしたの？　百五十円と差を付けたつもりなの？　それならいっその事百円ピッタリにするべきなんじゃないの？　ねえ、どうして？」

「……」

僕は言葉を失った。　つか誰でも唖然とするだろうこれ、どうしてこんなに舌が回るのだと地味なところにつっこんでおこう。　これはどう対処すればいいんだろう……

無理やりに終わらせるしかないだろこれ！　実行あるのみ！

「……」

僕はポケットに手を突っ込んだ。　あった！　帰りに喉が渇いた時の緊急用の百五十円だ。　今日は家に財布を置いてきたから助かった！　僕は自動販売機の人を無視して百五十円を自動販売機に突っ込んだ。

「ねえ～どうして！」

「……」

自動販売機の人が話しかけてくるが無視、しゃべったら敵の思惑通りだ。　村人Ａのスルースキルなめんな！

「……」

僕は無言で百二十円のプリンシェイクの真下のボタンを押す。彼女の言うとおりにコーラが出た！……訳も無くプリンシェイクが出てきた。

「……ほら、飲んでみろよ。」

「えっ？」

僕は自動販売機の人にプリンシェイクを差し出した。　自動販売機の人は僕の行動に驚いているようだ。　予想外だったのだろう。

「あんたの理論が正しければこのプリンシェイクの中身が麦茶やプリンシェイクのような飲み物かもしれないんだろう？　なら飲んでみろよ。　こっちは自信があるんだ。」

僕は村人Ａの村の紹介の時のような営業スマイルで自動販売機の人にプリンシェイクを渡した。

「わかった……飲んでみる……」

自動販売機の人はプリンシェイクの缶を開けてプリンシェイクを飲んだ。

「どうだ？　麦茶だったか？」

僕はニヤニヤしながら自動販売機の人に言う。　もう村人Ａじゃなくて魔王の手下Ａだな、笑顔が殺人兵器のようだと変な例えをつけられるレベルの奇妙さらしい友達Ｂがそう言ってた。

「……プリンシェイクって美味しいね！」

自動販売機の人は満面の笑みでそう答えた。

はーい、時間が飛びましたーお約束だなー

今はクラス発表も終わり、座席の番号順に移動しているところだ。

僕は一番後ろの席だった。

目立たなくていい席じゃないか神様……いいやつじゃないか、後でお賽銭でも入れに行くか。などと一般人が考えなさそうな事を考えていると……

「あっ！　さっきの人だ！」

賽銭箱に玩具銀行の一万円札突っ込んでやる！

今話し掛けてきた人は僕が不良に絡まれていたのを助けた女の人ではない。　つかそんな場面ありえない。　あったとしても村人Ａの僕がそんなイベントに首を突っ込む訳無い。

さっきの変人こと自動販売機の人だ。
くそ！　何でこんなイベントが立て続けに！

一般的な主人公なら喜ぶだろうが僕は村人Ａだ。唯、村の説明をする役割が与えられてる僕にイベント何てありえない！

あるとしたら村壊滅イベント……やばい平穏が乱れる！
魔王襲来イベントじゃねえか！くそ！
急いで対処法（バリスタ）を用意しないと……！

選択肢が浮かばねえええ！！
やばい！どうする僕！　続きはＷｅｂでが使えないだと！

やばいやばい！ノミの心臓を擬人化したような人間などと呼ばれている僕は心臓が今にも止まりそうです。　日本語がおかしいのはテンパってるからと判断してくださいお願いします。

やばいやばいやばい！　どうすればいいんだ！

諦めて……普通に対応する？
それが一番いい判断だと思う僕。この人無駄に声でかいから早めにぱっぱと終わらせないと目立ってしまう！

「ああ、さっきの自動販売機の！」

わざとらしいと言わないでくれ。　今心臓がバックバクなんだ。

「うん！　小坂（こさか）　真夏（まなつ）って言うんだ！　これから『隣同士』仲良くしてね！」

隣……同士……だと……！？

名前順とか考えたやつ爆発しろ。　これから僕はこの変人の隣なのか……

はぁ……いや、そんな変人変人言うのは失礼だし仲良くしないとな！

「僕は小糸歩生　これからよろしくな！」

「うん！　じゃあ早速だけど歩生～」

「何だ？」

「え～とね……聞きたい事がね～『二万三千六百二十七個』あるんだけど」

僕の平穏が音を立てて崩れさる音がした。

平穏終了のお知らせ

一話、自動販売機の人（後書き）

長い台詞のところを全て読んだ人いるかな？いないと思う…ショボーン

二話、信号機の人（前書き）

とことんネガティブ歩生くん

二話、信号機の人

変人なんか嫌いだ……

あれから膨大な数の質問をされて疲れきっている村人Aこと僕、歩生です。　今は学校も終わり、下校中です。　村人Aにあんなに質問する人なんかいないと思ってたのに……

はぁ……今日は帰って寝よう。　友達Cに遊ぼうとか言われたけどそんなものなかった。

自動販売……自動販売機の人って長いから真夏でいいかな？　変わってるけど名前で呼ぶくらいは……はぁ……

ニックネームはプチエジソンだな。　頭いいかは知らないけどね。

さて、あの信号を渡れば近道……あれは……怪しい……

僕は信号が青になっても赤になっても微動にせず唸ってる女の人を見つけた。　真夏と同じ匂いがする……

僕の変人レーダーに反応あり、直ちに逃走準備を……赤信号だった。

僕は信号機の人（命名）の隣に立つという極めて危険な行為にでた。　仕方ないだろう？　何故かこのタイミングで子ども会らしき団体が僕の横で並んでるんだもん。　集団には勝てない。　村人A

だもん。

車用の信号が黄色になり、赤になった。　そして歩道用の信号が青になった。　よし！　ここで一気にダッシュだ！　村人Ａの逃げ足なめんなよ！

「……ふーむ、なぁ、そこの君」

信号機の人に話し掛けられた。　これなんてデジャブ？　僕は変人ではないことを祈りながら信号機の人に返事を返すことにした。

「何ですか？」

今となっては唯の弱パンチレベルにまで陥ってしまった技、『敬語で他人との距離が取れるかもしれない……いや、絶対じゃないですよ……はい』、これは変人には利かないらしい。　なんという意味の無い技だ。　どっかの化け物のはねるじゃないか。

「敬語じゃなくていいぞ。私は君と同じクラスだったしな！」

同じクラスだったーーー！！　くそ！　僕のクラスには変人が二人もいるのか！？　いや、この人が変人と決め付けるのは明らかに早い。　真夏とは違い普通の人かもしれないじゃないか！

「え～、じゃあ、何だ？」

「ふむ、この信号が今、青か赤かわからないのだが今はどっちなんだ？」

うわーー！　変人の確立たけええええ！　ちなみにこの人の容姿

は何故か真っ白の髪の短い髪で服は白黒、変わった人の予感がぷんぷんするぜ！

「いや……見たらわかるでしょう？　今は青ですよ。」

子ども会らしき団体が今ゆっくりと歩いている。　つか、誰がどう見ても青だろう。

「ふーむ……青か、じゃあ、渡ろうかな？」

「いやいやいや！今点滅してるじゃないですか！　危ないですよ！」

信号機の人が歩き始めたのを止める僕。　ほら！赤になった！危ないなあ

「ふむ、今が赤か。　わからないなぁ～」

わからない……ってどこからどう見ても赤だろう。　確実に、絶対的に、完全に

「わからないってどういう事だ？」

「ふむ、私はな……『世界の全てが黒と白にしか見えないのだよ』」

黒と白……確か全色盲だっけ？　テレビでやってたな、見えるものが白黒テレビみたいに白黒になる病気だったな、だから青信号か赤信号かもわからないのか！

……ってあれ？おかしくね？

「いや、白黒に見えるのはわかるけどさ、マークでわかるんじゃね？　ほら歩いてるマークと止まってるマークで」

「ふむ、私はな青信号じゃなければ渡らないのだ！　つまり私の見えてる白黒っていう色以外の色ってことだ。　確実に青信号と確定できん限り私は渡らん！　間違えて赤信号で渡ってたらどうするのだ！　マークが歩いてるか止まっているかなど色が青か赤と確定できるものではないだろう！　あの渡りきった子供たちだって実は赤信号で渡っているかも知れんだろう！　集団で渡ってるから赤信号でもごり押し出来るんじゃないのか！　赤信号、みんなで渡れば怖くないってどこかで聞いたことあるしな！　あの青信号になったら音が出る障害者ようのやつだって実は赤信号ですので注意してくださいって意味かもしれんだろう！　私はそんな危険な賭けに出たくないね！　私は安全に確実に絶対的にこの信号を渡りたいのだ！　例え、他人が歩いてるからと言ってそんな赤信号かもしれないところに飛び出すほど馬鹿な私ではないのだよ！　他人なんか信じられん！　他人なんだから！」

……思いっきり変人だった。　確実に、絶対に、確信的に

信号機の人は真夏とは間逆のタイプだとわかった。　真夏は他人に答えを求める変人だったがこの人は他人との違いを言い切る変人だった。　変人は変人なんだけどね。

僕はどう対処すればいいのだー。　あっ……村人Ａにぴったりな対処法を思いついたぜ。

信号は完璧すぎるタイミングで青になった。　これは村人Ａである僕に頑張れと応援してくれてるのか？　信号が仲間になった。現在のパーティ、村人Ａ、信号機、魔王、カオスなパーティ過ぎる。

さあ、村人Aが馬鹿なことするので苦笑いでご覧ください。

「……」

「ぬお！」

村人Aこと僕は信号機さんの手を掴み信号を渡る。　今の作戦はガンガン行こうぜ！かな？　セクハラって言わないで欲しい。　チキンなハートの持ち主である僕はその一言で瀕死状態になってしまうのだ。

スライムのほうが絶対強いな。

そんな馬鹿な事を考えてる内に渡りきってしまった。　キャームラビトエーサンカッコイイーって声が聞こえない……ちくしょう！

「何なんだ！　何故赤信号か青信号かもわからないのに渡らせたのだ！　そんな危険な事……」

「いや、危険じゃないよ。　だって僕の名前が歩生（あおい）だから大丈夫だよ！」

僕の渾身のネタ、友達Fから59点貰った自信たっぷりのネタだぜ！

滑ったら現在進行形で赤信号の中を走りぬいてやる。

「……ぷっ、あはははは！！」

キターーーーー！！　成功だあああああ！　滑らなかったあああああ

ああ！

「いや～そんな馬鹿馬鹿しくて面白みも無くて痛々しくて恥ずかしいネタをする人間がいるとはな～あはははは！！」

うわーーー！！　僕の人間性を疑われたあああ！　でも滑らなかったあああああ！

「……死にたい」

「いや～面白かったよ～結構センスあるね。　一発屋だけど！　あはははは！！　はぁ……あ～笑った笑った。　久しぶりに大笑いしたな～　ああ、私も名乗っといた方がいいのかな？　私は青江（あおえ）赤絵（あかえ）、変わってる名前だろ？　軽々しく赤絵って呼んでくれ青信号君」

「わかったよ赤信号ちゃん」

ちょっとだけ仕返し。　村人Ａはこの程度の仕返ししか出来ない悲しいやつなのだ！　泣きたい……

今日、変人に二回も会ってしまった僕、この先どうなるのか！　村人Ａだしもう終了だよね？　と神様に利きたい今日の僕。

二話、信号機の人（後書き）

また長い台詞が…読んだ人いるかな？

三話、人体模型の人（前書き）

頑張っても５０００文字しか書けない僕に文才をください

三話、人体模型の人

前回のあらすじ……二人の変人に出会った。　終わり。　終われ。　終わってくださいお願いします！

村人Ａにイベントなんていらないだろ！　村が壊滅する時に逃げ惑う民の役がお似合いなのだ。

でも、こんだけイベントに遭遇するとは……もしかして僕は村人Ａじゃないんじゃないのか？　今更かよと言わないで欲しい。　村人Ａの考え方だとネガティブだぞと友人Ｈに言われてたな。　じゃあ……武器商人Ｂぐらいかな？　調子に乗りすぎた……村人Ａはすぐ調子に乗ってしまう生き物なのだ。

などとファンタジーな考えのまま僕は家のドアを開けた。　何で開けたかって？　決まってるだろう。　学校だ。　あー、でも真夏（自動販売機の人）の隣だと絶対変人扱い……いや、この際真夏を変人から真人間にすればいいのだ！　ついでに赤絵（赤信号ちゃん）も真人間にしてしまえばいいのだ！

村人Ａの僕の特殊能力で僕の近くにいるだけで普通の人にしてしまうというさいきょー能力があるのだ！　とかだったらよかったのに……　まぁ、僕の近くにいるだけで普通になるだろう。　だって僕面白くないし。

などと自虐しながら現実に目を向けると……

「あ～！　『好きな食べ物は』鮪『嫌いな食べ物は』甘いもの全般『将来の夢は』公務員『好きなアニメは』チーズスイートホーム『

嫌いなアニメは』特になし、【以下略】の歩生君だぁ〜！」

何故目の前に自動販売機（真夏）がいるんだあああ！！　僕の目がおかしいのかあああ？　いやおかしくなかったあああ！目を擦っても消えなかったあああ！　心臓が止まりそうだあああ！

……落ち着け僕、僕は手のひらに一般市民と三回書き、飲み込んだ。　これが現実逃避のおまじない。

ふう……落ち着いた。　落ち着いてないけどそう脳に思い込ませるのだ。　ひ弱な僕はこれが日常茶飯事なのだ。　全く、主人公とはかけ離れてるなあ僕は

「どどどっどどどどどどどっどどどうして僕ん家の前に？」

落ち着け僕、気持ち悪いぞ。　どんだけテンぱってんだ僕、体が変人嫌いなんだろう。　僕の体が小刻みに震えてるのはそのせいだ。

「私の家がここから近いからだけど……ねえ、どうして？　どうして小刻みに震えながらどどどって言ったの？　ねえ！どうして？」

どうしてモード入りましたー。　しかもご近所さんだったー。絶望的だー。　泣きそうだー。　しかも僕の恥ずかしくて枕に蹲って足をパタパタさせるレベルの出来事をした理由を追求するとかどんだけ鬼畜なんだー。　無邪気って怖いー。

「それはな……リズムを刻まないとロッカーは死んでしまうか

らだよ！」

僕はドヤ顔でそう言った。

その夜、枕に蹲って足をパタパタさせたのはまた別のお話。　しないけどな！絶対に！

はい、過去からの皆さんこんにちはー。　黒歴史製造機こと村人Aこと歩生です。　今は授業も終わり昼食タイム～って状況です。　友人A～Hとは別の学校だし一人さびしく村人Aらしくぼっちで悲しく食べるとするかな？　とか友達いないやつあるあるを実行しようとすると……

「『好きなスポーツは』テニス『嫌いなスポーツは』サッカー『特技は』他人に気づかれなくできる事『好きな楽器は』トロンボーン『好きな音楽は』クラシック『嫌いな音楽は』メタル系、【以下略】の歩生君！　一緒にご飯食べよ～」

僕はどうすればいいのだろうか。　いや、誘いを断るのは人間として駄目だ。　変人とかの問題じゃない。　それは人外だ！

「ああ、一緒に食べ」「ふむ、私も混ぜてくれないか？　青信号君」

「……そういえば同じクラスだったな赤信号ちゃん」

忘れてた。　クラス同じだけど忘れてた。　白髪で目立ってる筈なのに忘れてた。　小説とかの設定でよくある十人中十人が振り返るような美人で高嶺の花とまで言われてるらしいけど忘れてた。

とにかく、思いっきり忘れてた。　あの人は出オチキャラだと思ってたな。

「誰？」

安定のクエスチョンマーク。　この人はクエスチョンマークだけでキャラクターが成り立っているのだろうか。　絶対そうだ。　頷ける。

「この人は青江赤絵。　昨日信号で出会ったんだ」

「信号で？　どうやって出会ったの？」

どうしてモードが止まらない真夏。　このモードに入ると村人Ａの体力と精神力、それにＭＰが半分以下になるのだ。
つまり、僕が瀕死状態になるのだ。

長いので一旦カット

「はぁ……」

カット終了。　僕は瀕死状態。　ポケットサイズのモンスターならピコンピコンと危険な状態だ。

早くきずぐすりが欲しい。　出来れば精神回復も出来る魔法みたいなやつ。

「大丈夫かい？　青信号君。」

赤信号ちゃんが僕のエスオーエスに気付いたようだ。　てか気付かないのは真夏ぐらいだろう。　今も頭にクエスチョンマークを付けて首を傾げている。

いい性格してるよコイツ！　と口に出せない僕は本当にチキンですねありがとうございました。

「時間もないし早くたべようよ～」

皆、誰が言ったと思う？　ヒント　口調

正解は真夏だよこの野郎！！　赤信号ちゃんも呆れてるじゃねえか！

とは口に出せずに嫌そうな顔しか出来ない僕。（チキン）

泣きたくなるね！

皆が急いで食べるだけなのでカット

こんにちは、過去の皆さん。　皆、時を越えすぎです。

今は放課後でまさかのご近所さんの真夏と、学校の隣に家があるというチート、赤信号ちゃんと一緒に下校するところです。

今日、わかったことは赤信号ちゃんは普通の人でした。　よかったです。

何故か三階にある一年三組から階段で下りているところです。

……あっ……今変な物を見た……気がしたけど気のせいだったぜ！

とは言わないが無視して階段を下りる。

「ねえ！　どうしてあの人は人体模型に敬礼してるの？」

真夏が見つけてしまった……

そう、僕が見た物とは、実は者で、理科室の人体模型に敬礼しているという何ともシュールな光景だったのだ。

絶対変人だ……

「ねえ！　何なのあれ？」

こっちが聞きたいって台詞が一番似合うシーンだ。　まじ何なんだあれ？

「ふむ……何事も実行有るのみだ。　行くぞ、青信号君」

あれ？　常識人認定した赤信号ちゃんが張り切ってる。　なんか未知の物を見つけてはしゃぐ子供みたいな感じ……この人は唯我独尊、石橋を叩かず全力ダッシュ！みたいな自己中心的な変人だったんだ！

今の村人Ａの気持ち（オーマイガー）

作戦、ピンチで頑張れない。

特性、チキンなハート……蝉の鳴き声でビビる。

ファンタジーの主人公達の能力を十分の一程度分けてほしい。

僕は赤信号ちゃんに腕を引っ張られ、理科室に向かう事になった。

通常の男子の考え……美人に手を掴まれてる！！

村人Ａ（主人公？）の考え……悪魔が地獄に連れて行こうとしてる！！

僕のネガティブ度は異常なのだろうか聞きたい。

「うわっ……」

リアルにうわって言ってしまった。　だって僕の変人メーターの針がふっ切れてしまうレベルだぜ？　絶対、えげつない変人だもん。

今度は床に座り込んで何かぶつぶつ言ってるのだ。

ちなみに毛布が上から被さってある為性別もわからない。

話し掛けたくねぇ……ホラー映画みたいな展開も有り得る。

特性がチキンなハートの僕はホラーも苦手なのだ！　弱点だらけじゃないか村人Ａ。

「ふむ、率直に言わしてもらおう……誰だ！」

赤信号ちゃんが犯人を追い詰めた探偵のようなポーズで人体模型の人（命名）を指差した。　もうあなたが主人公だよ。　てか勇者

だよ。

現在のパーティ……村人A、魔王、勇者

どんなパーティだよ！　ゲームクリアした後なのはわかるけど、村人A浮いてんじゃねえか！

主人公補正が欲しい僕、歩生だけに

相変わらずギャグセンスは村人Aだなとか馬鹿なこと考えて現実逃避していた。　現実に戻ってみようう。

「¥；＊？＞：」・：；：」。！！」

人体模型の人は驚いてるようだけど日本語で驚かなかった。　何かもにゅもにゅ言ってる。　毛布被ってるからじゃね？

「ふむ、毛布を取ってもらおうか！」

勇者赤信号は毛布を取った。　なんと人体模型の人の正体は女の子だった。　……この子、同じクラスじゃなかったけ？

「ふむ、君は確か……」

「そうさ、僕は野月（のづき）　誓（ちかい）……だがそれは人間界での名前さ！」

いたたたたたたたたた！　変人じゃなくて痛い子だったー！　ってか電波あああ！

「……あれか？　あの宇宙人的なあれか？」

「宇宙人？　あんな非科学的なものを信じてるのか？　あはは！　僕はそんなちんけなもんじゃなくてもっと現実的なものなのさ！」

宇宙人ーとか言う子じゃなかった。　てかこの子確かクラスで終始無言だったのにこんなに喋る子だったのか。　ちなみに容姿は茶髪のショートヘアー、身長は小さい、まじで小さい。

「僕は地底人なのさ！」

結局電波だあああああ！！　地底人って新しすぎるうううう！　しかも何故決め顔おおお！

「ふむ、地底人と宇宙人ってそんなに変わらなくないかい？」

赤信号先輩！　それは絶対禁句だ！

「僕達地底人を馬鹿にしては困るね！　僕はこの人間界の地下の地下の地下にある地底界から来た地底人、９７９７８９００号だ！　僕が人間界に来た理由は３っつある。　１つ、人間の調査、人間が地底人に迷惑を掛けるかどうかの調査だ。　２つ、人間との交渉、人間と地底人が一緒に共存できるか人間の代表者との交渉、交渉内容は主に今の人間の生き方、地球を傷つけすぎていることについてだ！　３つ、交渉決裂した場合の人間の破壊オア消滅、戦争準備だ！　以上が僕、地底人が地上にやってきた理由だ！　そんな宇宙人とか言ってる痛い子とは違うのさ！」

痛かった。　痛い子だった。　痛かった。　謎俳句完成。

なんで僕の周りの女子は変人ばかりなんだあああああ！　とうとう電波だぞこらあああああああ！

「じゃ……じゃあ、どうして人体模型の前でぶつぶる言ったり敬礼したりしてたんだ？」

「うん、それはね……地底人に思いのほか似ててさー、しかも一番偉い人にそっくりなんだよ。」

地底人とは人体模型にそっくりなのか……

「ふむ、人体模型とは人間の体の器官がわかるように作られた模型なんだぞ、なのにそれが地底人に似ているとはどういうことだ？」

僕も不思議に思ってることを赤信号ちゃん（勇者）が聞いてくれた。　気が利く子である。　流石勇者

「んー？　実は人体模型のモデルは地底人なのさ！　人間が奇跡的に見つけた地底人のモデルが人体模型なんだよ！　それが偶然にも人間の内部とそっくりだったからそのまま使われてるのさ！　憶測だけど」

最後の一言で台無しになってしまった力説である。　そ……そうか！人体模型は地底人がモデルなのか！　とか思わないよーに。

「ふむ、『人体模型とはヒトの体の全部もしくは一部を模した人形である。概して、人体の内部構造を見ることができるようになっており、またそれぞれの臓器が一つ一つのパーツとして取り出すこと

が可能となっているものも多い。全身骨格模型や頭蓋模型、筋肉解剖模型、人体解剖模型など用途に合わせて多くの種類がある』とこの辞書には載ってるぞ？」

何故か辞書を持ち歩いていた赤信号ちゃんが人体模型と書いてあるページを見せた。　他人の言葉に左右されない彼女が持ってるという不思議は置いといて

「はっは～！　それだから人間は甘いのさ！　それは何百年も前の話でしかも製作者は地底人と出会ったことを内緒にしていた。　それは地底人の存在をみんなに知られたくなかったからだ！　憶測だけど……」

この人は自信があるのかないのかわからんな。　憶測だけどが印象的すぎる。

「ふむ、全部憶測じゃないか。　私は自分の見たもの以外信じない主義なのだよ。　行こうか青信号君、こんな妄想女の戯言に付き合うほど私は暇じゃないのでね。」

うおっ……怖ッ！　赤信号ちゃん（実はラスボス）の顔がおっそろしいほど無表情だ。　もう興味がないみたいな感じ。　人体模型の人、涙目じゃないか、はぁ……、村人Ａのフォローを無表情でご覧ください。

「そうか！　誓は地底人なのか！　道理で人間がするとは思えないようなことをする訳だ！」

「……！？　そう！　僕は地底人なのさ！」

フォロー成功、これが村人Aクォリティー。　勇者（赤信号ちゃん）もびっくりだ。　てかやれやれだぜって顔してる。

「……ふむ、君は優しすぎるよ。　まったく」

「優しくなんかないよ、唯……ビビリでチキンで弱虫の泣き虫で臆病でへっぽこで残念で心配性で恥ずかしがり屋で弱くて脇役で凹みやすくていじめられっ子体質で変人に遭遇しやすい村人Aだから……」

自虐しすぎて死にたくなった。　床に頭を着けて凹んだ。

「「……変なやつ」」

変人に言われたくねえええええ！！

僕はまた変人に会ってしまった……二度あることは三度あるだからもう無いよね？

今日の教訓……変人は変人を呼ぶ

三話、人体模型の人（後書き）

わんぱたーん（笑）って言われる自信しかありません！

四話、お面の人（前書き）

不定期になりかけ

四話、お面の人

実は今までの話は全部夢だったんだ！　だからあの個性豊かな三人は存在しないんだ！

おしまい。

とかだったら僕は死ぬほど喜んでいただろう。　だけど現実はアマクナイー。

でも現実ミタクナイー。　とか馬鹿なこと思っていたら放課後になっていた。　まじ怖い。

「『嫌いなバケツは』ポリバケツ『好きなバケツは』鉄製のバケツ『嫌いな飲み物は』ジュース全般『好きな飲み物は』麦茶『嫌いな人物は』変人『好きな人物は』一般庶民、【以下略】の歩生君！　部活見学行こ～」

自動販売機で有名なこの人、真夏がいつもの長い台詞と共に僕の頭の辞書に書かれていない言葉を言った。　部活見学……？

「ふむ、その顔は絶対に忘れてる顔だね。　いや、忘れてると言うより土管みたいに筒抜けだったのかな？　今日から部活見学だろう？　青信号君」

聞いてませんでした。　冗談抜きで

まさか部活見学とは……部活なぁ～運動系はまずなしだな。　だって試合とか皆に見られるし緊張するし、僕の心臓がマッハでやばい！　がガチでなっちゃう人だからなあ～。　村人Ａクォリティー（笑）

「ししっししししっししっししし知ってたよ！！」

デジャブと何回言えばいいのやら。

また質問攻めにされたので一旦カット

「……」

今の僕の状況わかりますか？　ぶっ倒れてます。

いつもより質問が長かった。　はぁ……

「頑張れ青信号君！　ガッツだファイトだ！」

同情した赤信号ちゃんのキャラが変わるぐらいの長さです。　ありがとー赤信号ちゃん！　少しは加減してね真夏！

きもいのは自覚してるので利かない。　村人Ａの被害妄想をなめるなよ！

「何してるのー？　早く行こうよ～」

いつの間にかドアのところにいる真夏、だからデジャブ……

怒らないのはチキンだからと後何回説明すれば……

「……？」

真夏は部活案内用紙を見ながら首を傾げた。　どうしてモード……始動！　憶測だけどってね。

「文芸部？」

真夏は文芸部が気になるようだ。　文芸部とは小説を書いたり詩を書いたりと正に文型と言った感じの部活だ。

「ふむ、文芸部か……気になるし行ってみるかな？」

赤信号ちゃんも乗り気なご様子。　まぁ、僕も気になるし行って見ようかな？

「うん、僕も気になるし行こうか。　え～場所は……図書室？」

図書室でやってる部活なのか。　珍しい。

てな訳で図書室へレッツラゴー！（死語）

着きました。　小説って便利です。　主人公の言う台詞じゃない

ね！　メタ発言までしてしまうのが村人Ａなんだよ！

「失礼しまーーーす！！」

すぐに図書室に入る真夏、ちゃんとマナーは守っているようだ。

後、目が真新しい十円玉みたいにピカピカしてる。　村人Ａの例えなどこの程度なのだ。　早く村案内したいです。

「ふむ、行くぞ青信号君。」

僕は主人公みたいに待てよ～とか言うキャラじゃないので無言で着いていった。

全く、僕は主人公にも脇役にも向いてないようだ。

生まれ変わるなら猫になりたい。

楽だから

「失礼しま……あっ……」

図書室に入ってみたら地底人がいた。

人体模型ではない誓（人体模型の人）だ。誓の近くで真剣な顔で何か書いてる人がいるけど文芸部の人かな？　一人しかいないけど……

「あっ！　人間の代表者、歩生じゃないか！　歩生も文芸部入るのか？」

僕の役職が村人Aから人間の代表者にランクアップした。
いや、アップし過ぎだろ！　スッポンが月に変わるぐらいのランクアップだよ！
……この文芸部で面白い例えを習ってちょっとでも笑われるような村人A（ランクダウン）になりたい。

「お前、大人しい女の子キャラ辞めたのか？　先輩がいるなか電波飛ばして大丈夫なのか？」
えげつないほど電波が飛び交っているが大丈夫なのだろうか。

「大丈夫なのさ！　この人にはちゃんと僕が地底人だって話したから！」
大問題だって言いたい。　この人が普通の人なら大問題何だが……

「あー、地底人なんだろー？　この子ー。　わかるわかるー。」
この人も見た感じ変人何だもん……
変人メーターが爆発した。　理由はこの人の見た目。
何故か三分しかもたないヒーローのお面を着けている。　ちなみに女の人だ。　声で判断したけどたぶん合ってるだろう。
「ふむ、文芸部の方かな？」

「そうだよー。　私は……今日は何にしようかなー？　じゃあ、三分間ヒーローでいいやー。　三分間ヒーロー先輩とでも呼んでくれー。」

『今日は』って……毎回違う呼び方にしてるのか。　お面の人（命名）は一人称が私だし、ツインテールだし

「では三分間ヒーロー先輩、どうして一人しかいないんですか？」

無駄に広い図書室に文芸部は一人だった。　地底人は合わせない。

「んー？後二人いるんだけどー。　後、この地底人の子も入ったよー。」

すでに誓は入っていた。　でも合計四人しかいないのか。　五人いないと廃部になるんじゃ……

「あー、その顔は廃部とかそんなこと考えてるでしょー？　まだセーフなんだよセーフー。　部員数が４人以下で一年間経っても４人以下だった場合ー、廃部なんだよー。だから後三月末までセーフー。」

「ふむ、と言うことは前は五人以上だったが二人以上が卒業してしまったってことか？」

敬語ー、赤信号ちゃん敬語ー。　自然過ぎてわからなかったけど敬語ー。　この人先輩だからー！

「んー、その顔は敬語使えとか思ってるでしょー？　いいよいいよ

ー。　私二年生だし、一個しか変わんないだからー。　後、前は五人だったんだけど一人は卒業して一人は退学しちゃったんだー。」

三分間ヒーロー先輩はお面を着けてるからわからないけど残念そうだった。　退学って何があったんだろう。

「ぬー、その顔は退学の理由が知りたいのかなー？　その子は自主退学だったから理由は不明なんだよー。　変わった子だったけど。」

……さっきから気になってたけどこの人心読みすぎじゃね？　何か読唇術的な何かを感じる。　それかエスパー？

「うぇー、その顔は私がエスパーか何かと勘違いしてる顔かなー？　そんな非科学的な根拠が微塵も無いものと一緒にして欲しくないねー……私は表情を見て大体だけど他人の考えてることがわかるんんだよー。」

エスパー嫌い過ぎだろ。　偉い人に怒られるぞ。　ミスターなんとかに消されちゃうぞ！　あの人の手力は怖いんだぜ？　そこら辺のホラーより怖い。　ああ、僕もこれ以上話すと消えちゃうのでパシューンと、お口をミィフィー。

「それよりー、部長まだかなー？」

ごまかされた気しかしない。

今日の格言、変人は一人見たら五十人いる。　絶対！

四話、お面の人（後書き）

短いなぁ、長い台詞もないし

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1476w/

僕が歩けば変人が見つかる

2011年9月1日01時28分発行